

第七調

「スポタ」の大晩課 四七六

「スポタ」の大晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十句を立てて主日の左の讚頌を歌ふ、第七調。ダマスクのイオアンの作。

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。
來りて、死の權を滅し、人類を照しし主の爲に喜びて、無形の者と共に呼ばん、吾が造成主及び救世主よ、光榮は爾に歸す。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。
救世主よ、爾は我等の爲に十字架と葬とを忍び、神なるに因りて死を以て死を滅し給へり。故に我等爾の三日目の復活に伏拜す。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。
使徒等は造成主の復活を見て、奇として、諸天使の讚美を歌へり、是は教會の光榮なり、是は國の富なり。我等の爲に苦を受けし主よ、光榮は爾に歸す。

又讚頌、アナトリイの作。同調。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。
ハリストスよ、不法の人人に執はれたれども、爾は私の神なり、我耻ぢず、肩を打たれたれども、我諱まず、十字架に釘せられたれども、我隠さず、我爾の復活を誇る、蓋爾の死は私の生命なり。全能にして人を愛する主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

ハリストスはダビデの預言を行ひて、シオンに於て己の尊大なるを門徒に顯して、己が常に父及び聖神と偕に讚美讚榮せらるる者なるを示せり。蓋彼は先に無形なる言にして、後に我等の爲に身を取り、人と爲りて殺され、權を以て復活せし仁愛の主として讚榮せらる。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。
ハリストスよ、爾は欲せし如く地獄に降り、神及び主宰として死を滅し、三日目に復活して、アダムを地獄の桎梏及び朽壞より己と偕に復活せしめて、呼ばしめたり、獨人を愛する主よ、光榮は爾の復活に歸す。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。
主よ、爾は寝ぬる者の如く墓に置かれ、能力の強き者として三日目に復活し、全能者としてアダムを己と偕に死の朽壞より復活せしめ給へり。

又生神女の讚頌、アモレイのパワェルの作。第二調。

第七調 「スポタ」の大晩課 四七七

第七調 「スポタ」の大晩課 四七八

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

讚美たる女宰、我等の轉達者よ、爾は天使等の歡喜、爾は人人の光榮、爾は信者の倚頼なり。神の聘女よ、我等爾を讚め歌ふ衆人は凡の危難の中に爾に趨り附く、爾の祈禱

を以て敵の矢と、^{もつ てき や たましい なやみ しゅじゅ うれい のが ため}靈の惱と、^{ばんみん しゅ ほめ あ ばんぞく かれ あが ほ}種種の憂より脱れん爲なり。

句、^{ばんみん しゅ ほめ あ ばんぞく かれ あが ほ}萬民よ、主を讃め揚げよ、^{さんび しょうしんじょ おっと し み せかい ため かみおよ きゆうせいしゅ う じょさい ひとり}萬族よ、彼を崇め讃めよ。

^{さんび しょうしんじょ おっと し み せかい ため かみおよ きゆうせいしゅ う じょさい ひとり}讚美たる生神女、^{ら かくれが もの なんじ われ たのみ なんじ われ てんたつしや かき かくれが}夫を識らずして身にて世界の爲に神及び救世主を生みし女幸、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}獨ハリステイアニン等の避所なる者よ、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}爾は我の倚頼、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}爾は我の轉達者と、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}垣牆と、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}避所なり。^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}爾の祈祷を以て我等を圍む誘惑と、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}危難と、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}患難より脱れしめ給へ。

句、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}蓋彼が我等に施す^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}憐は大なり、^{なんじ きとう もつ われら かこ ゆうわく きなん かんなん のが たま}主の眞實は永く存す。

^{しょうしんどうていじょ わ にくたい うごき とど わ よく ほのお け わ のぞみ あくあつ われ しりぞ}生神童貞女よ、^{しょうしんどうていじょ わ にくたい うごき とど わ よく ほのお け わ のぞみ あくあつ われ しりぞ}我が肉體の動揺を止め、^{しょうしんどうていじょ わ にくたい うごき とど わ よく ほのお け わ のぞみ あくあつ われ しりぞ}我が慾の焰を滅し、^{しょうしんどうていじょ わ にくたい うごき とど わ よく ほのお け わ のぞみ あくあつ われ しりぞ}我が望の悪熱を我より退
^{わ がんこ ならわし あらた われ あくき こうげき まも たま わ ところ あんせい わ たましい}け、^{わ がんこ ならわし あらた われ あくき こうげき まも たま わ ところ あんせい わ たましい}我が頑固なる風習を改めて、^{わ がんこ ならわし あらた われ あくき こうげき まも たま わ ところ あんせい わ たましい}我を悪鬼の攻撃より護り給へ、^{わ がんこ ならわし あらた われ あくき こうげき まも たま わ ところ あんせい わ たましい}我が心の安静、^{わ がんこ ならわし あらた われ あくき こうげき まも たま わ ところ あんせい わ たましい}我が靈
^{およく うち なんじさんび もの ほ うた ため}の無慾の中に爾讚美たる者を讃め歌はん爲なり。

光榮、今も、生神女讚詞。

^{しょうしんじょ なんじ せい こ はは し ことば ちしき こ どうていじょ とど した なんじ}生神女よ、^{しょうしんじょ なんじ せい こ はは し ことば ちしき こ どうていじょ とど した なんじ}爾は性に超えて母と識られ、^{しょうしんじょ なんじ せい こ はは し ことば ちしき こ どうていじょ とど した なんじ}言と智識に踰えて童貞女に止まれり、^{しょうしんじょ なんじ せい こ はは し ことば ちしき こ どうていじょ とど した なんじ}舌は爾
^{の産 きせき い あた けだしきぎよ もの なんじ はらみ しえい さん さま さと がた かみ}の産の奇跡を言ふ能はず。^{の産 きせき い あた けだしきぎよ もの なんじ はらみ しえい さん さま さと がた かみ}蓋潔き者よ、^{の産 きせき い あた けだしきぎよ もの なんじ はらみ しえい さん さま さと がた かみ}爾の降孕は至榮にして、^{の産 きせき い あた けだしきぎよ もの なんじ はらみ しえい さん さま さと がた かみ}産の状は悟り難し、^{の産 きせき い あた けだしきぎよ もの なんじ はらみ しえい さん さま さと がた かみ}神
^{ほつ ところ てんせい ほう か ゆえ われら みななんじ かみ はは し せつ なんじ もと}の欲する所には天性の法勝たるればなり。^{ほつ ところ てんせい ほう か ゆえ われら みななんじ かみ はは し せつ なんじ もと}故に我等皆爾を神の母と識りて、^{ほつ ところ てんせい ほう か ゆえ われら みななんじ かみ はは し せつ なんじ もと}切に爾に求
^{われら たましい すく いの たま}む、^{われら たましい すく いの たま}我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

次ぎて「穩なる光」。^{ボロキメン}提綱、「主は王たり」。^{ボロキメン}其他常例の如し。

挿句に主日の讚頌、第七調。

^{せかい きゆうしゅ なんじ ほか ふっかつ ひとびと なんじ み とも おこ たま しゅ こうえい なんじ}世界の救主よ、^{せかい きゆうしゅ なんじ ほか ふっかつ ひとびと なんじ み とも おこ たま しゅ こうえい なんじ}爾は墓より復活して、^{せかい きゆうしゅ なんじ ほか ふっかつ ひとびと なんじ み とも おこ たま しゅ こうえい なんじ}人人を爾の身と偕に興し給へり。^{せかい きゆうしゅ なんじ ほか ふっかつ ひとびと なんじ み とも おこ たま しゅ こうえい なんじ}主よ、^{せかい きゆうしゅ なんじ ほか ふっかつ ひとびと なんじ み とも おこ たま しゅ こうえい なんじ}光榮は爾
^きに歸す。

他の讚頌。

句、^{しゅ おう かれ いげん き}主は王たり、^{しゅ おう かれ いげん き}彼は威嚴を衣たり。

^{きた し ふっかつ ばんゆう てら しゅ ふくはい けだしかれ われら じごく くるしめ と}來りて、^{きた し ふっかつ ばんゆう てら しゅ ふくはい けだしかれ われら じごく くるしめ と}死より復活して、^{きた し ふっかつ ばんゆう てら しゅ ふくはい けだしかれ われら じごく くるしめ と}萬有を照しし主に伏拜せん、^{きた し ふっかつ ばんゆう てら しゅ ふくはい けだしかれ われら じごく くるしめ と}蓋彼は我等を地獄の苛虐より釋
^{その みっかめ ふっかつ もつ われら いのち おおい あわれみ たま}きて、^{その みっかめ ふっかつ もつ われら いのち おおい あわれみ たま}其三日目の復活を以て我等に生命と大なる憐とを賜へり。

句、^{ゆえ せかい けんご うご}故に世界は堅固にして動かざらん。

^{じんあい しゅ なんじ じごく くだ し とりこ さんじつ ひ ふっかつ われら なんじ}仁愛の主ハリストスよ、^{じんあい しゅ なんじ じごく くだ し とりこ さんじつ ひ ふっかつ われら なんじ}爾は地獄に降りて、^{じんあい しゅ なんじ じごく くだ し とりこ さんじつ ひ ふっかつ われら なんじ}死を虜にし、^{じんあい しゅ なんじ じごく くだ し とりこ さんじつ ひ ふっかつ われら なんじ}三日日に復活して、^{じんあい しゅ なんじ じごく くだ し とりこ さんじつ ひ ふっかつ われら なんじ}我等爾
^{ぜんのう ふっかつ さんえい もの とも ふっかつ たま}の全能の復活を讚榮する者を共に復活せしめ給へり。

句、^{しゅ なんじ い もの ごと ほか ふ いげん もの あらわ ぜんのうしや みっかめ}主よ、^{しゅ なんじ い もの ごと ほか ふ いげん もの あらわ ぜんのうしや みっかめ}爾は寝ぬる者の如く墓に臥して、^{しゅ なんじ い もの ごと ほか ふ いげん もの あらわ ぜんのうしや みっかめ}威嚴なる者と現れ、^{しゅ なんじ い もの ごと ほか ふ いげん もの あらわ ぜんのうしや みっかめ}全能者として三日目に

第七調 「スポタ」の大晩課 四七九

第七調 「スポタ」の大晩課 四八〇

^{ふっかつ しゅ おのれ とも ふっかつ よ ひとりひと あい しゅ こうえい なんじ}復活し、^{ふっかつ しゅ おのれ とも ふっかつ よ ひとりひと あい しゅ こうえい なんじ}アダムを己と偕に復活せしめて、^{ふっかつ しゅ おのれ とも ふっかつ よ ひとりひと あい しゅ こうえい なんじ}呼ばしめたり、^{ふっかつ しゅ おのれ とも ふっかつ よ ひとりひと あい しゅ こうえい なんじ}獨人を愛する主よ、^{ふっかつ しゅ おのれ とも ふっかつ よ ひとりひと あい しゅ こうえい なんじ}光榮は爾
^{ふっかつ き}の復活に歸す。

光榮、今も、生神女讚詞。

^{じょさい われら ち うま もの みななんじ おおい した ほし つ なんじ よ しょうしんじょ わ たのみ}女幸よ、^{じょさい われら ち うま もの みななんじ おおい した ほし つ なんじ よ しょうしんじょ わ たのみ}我等地に生るる者は皆爾の幷幪の下に趨り附きて、^{じょさい われら ち うま もの みななんじ おおい した ほし つ なんじ よ しょうしんじょ わ たのみ}爾に呼ぶ、^{じょさい われら ち うま もの みななんじ おおい した ほし つ なんじ よ しょうしんじょ わ たのみ}生神女、^{じょさい われら ち うま もの みななんじ おおい した ほし つ なんじ よ しょうしんじょ わ たのみ}我が憑特
^{われら あやまち たす われら たましい すく たま}よ、^{われら あやまち たす われら たましい すく たま}我等を無数の愆尤より援けて、^{われら あやまち たす われら たましい すく たま}我等の靈を救ひ給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。^{トロバリ}聖三祝文。「天に在す」の後に、

主日の讚詞、第七調。

^{ハリストス 神よ なんじ じゅうじか し ほろぼ とうぞく ため らくえん ひら けいこうじょ かなしみ なぐさ}ハリストス神よ、^{ハリストス 神よ なんじ じゅうじか し ほろぼ とうぞく ため らくえん ひら けいこうじょ かなしみ なぐさ}爾は十字架にて死を滅し、^{ハリストス 神よ なんじ じゅうじか し ほろぼ とうぞく ため らくえん ひら けいこうじょ かなしみ なぐさ}盜賊の爲に樂園を開き、^{ハリストス 神よ なんじ じゅうじか し ほろぼ とうぞく ため らくえん ひら けいこうじょ かなしみ なぐさ}攜香女の悲を慰
^{しと なんじ ふっかつ せかい おおい あわれみ たま った たま}め、^{しと なんじ ふっかつ せかい おおい あわれみ たま った たま}使徒に爾が復活して世界に大なる憐を賜ひしを傳へさせ給へり。

光榮、今も、生神女讚詞。

^{さんび もの なんじ わ ふっかつ ほうぞう なんじ たのみ もの しょうざい あなおよ ふち ひ あ たま}讚美たる者よ、^{さんび もの なんじ わ ふっかつ ほうぞう なんじ たのみ もの しょうざい あなおよ ふち ひ あ たま}爾我が復活の寶藏として、^{さんび もの なんじ わ ふっかつ ほうぞう なんじ たのみ もの しょうざい あなおよ ふち ひ あ たま}爾を頼む者を諸罪の穴及び淵より引き上げ給

へ。蓋爾生む前に、童貞女、生む時も童貞女、生みて後も猶童貞女に止まる者は、我等の拯救を生みて、罪に服せし者を救ひ給へり。

次に發放詞。

第七調 主日の早課 四九六

主日の早課

六段の聖詠畢りて「主は神なり」、第七調に依りて歌ひ、後主日の讚詞、「ハリストス神よ、爾は十字架にて死を滅し」、二次。光榮、今も、生神女讚詞、「讚美たる者よ、爾我が復活の寶藏」。次に聖詠經の常例の誦讀。

第一の誦文の後に主日の坐誦讚詞、第七調。

生命は墓の内に臥し、印は石の上に貼けられ、兵卒は寝ぬる王の如くハリストスを守り、天使は不死の神として彼を讚榮し、女等は呼べり、主は復活して、世界に大なる憐を賜へり。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。人を愛する主として爾の三日の葬にて死を携にし、爾の生命を施す復活にて朽ちたる人を復活せしめしハリストス神よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讚詞。

生神童貞女よ、我等の爲に十字架に釘せられて復活し、死の權を滅ししハリストス吾が神に我等の靈を救はんことを恒に祈り給へ。

第二の誦文の後に主日の坐誦讚詞、第七調。

ハリストス神よ、墓は封印せられしに、爾生命たる者は墓より輝き出で、門は閉ぢたるに、爾萬衆の復活なる者は門徒に現れて、彼等を以て我等に眞實の神を賜へり、爾の大なる憐に因りてなり。

句、主よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。兵卒が爾萬有の王を守るに、女等は涙を流し香料を攜へて、墓に趨り、相語りて曰へり、誰か我等の爲に石を移さんと。大なる議事の使者は死を蹈みて復活せり。全能の主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讚詞。

恩寵を蒙れる生神童貞女、人類の避所及び轉達なる者よ、慶べ、世界の救主が爾より身を取りたればなり、爾は獨母及び童貞女、恒に祝福讚美せらるる者なり。ハリストス神に全地に平安を賜はんことを祈り給へ。

應答歌、第七調。

我等の形を取り、身にて十字架を忍び給ひしハリストス神よ、爾の復活を以て我を救ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

品第詞、第七調。第一倡和詞。毎句復唱す。

ンオン^{イバコイ}の虜を迷より返しし救世主よ、我をも生かして、愆の奴役より脱れしめ給へ。

第七調 主日の早課 四九七

第七調 主日の早課 四九八

南風の時に齋と涙とを以て悲を播く者は、喜を以て永生の糧の束を刈らん。

光榮、

聖神には神聖なる寶の泉あり、彼より睿智、知識、敬畏は賜はる。彼に讚美と光榮、尊敬と權柄は歸す。今も、同上。

第二 倡和詞

若し主 靈の家を造らざば、我等 徒に勞す、蓋彼を外にしては、行も言も成らず。諸聖人は聖神に藉りて腹の果として、神の子と爲す諸父の教を生ず。

光榮

聖神には萬物の存在は繋る、蓋彼は萬有の先より在す神、一切の者の主、近づき難き光、萬有の生命なり。今も、同上。

第三 倡和詞

主を畏れて生命の道を得たる者は、今も何時も不朽の光榮の中に福樂を享く。牧師長よ、爾の諸子が枝の如く爾の席を環れるを見て、喜び樂しみて、之をハリストスに攜へよ。

光榮

聖神より恩賜の充滿、光榮の富、議事の 大なる深みは賜はる、彼は父及び子と同榮にして奉事せらるればなり。今も、同上。

提綱、第七調。

主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。句、主よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

「凡そ呼吸ある者」。句、「神を其聖所に讚め揚げよ」。

主日の福音經。「ハリストスの復活を見て」。第五十聖詠。及び其他次第に循ふ。

主日の規程、第七調。

第一 歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズライリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主よ、爾非義の裁判を以て死に擬定せられしに、死の權は木に縁りて擬定せられたり、故に闇冥の君は爾に勝つ能はずして、義に合ひて逐はれたり。

救世主よ、地獄は爾に近づきたれども、齒を以て爾の身を碎く能はずして、頤を壞られたり。故に爾は死の苦しみを滅して、三日目に復活し給へり。

生神女讚詞

第七調 主日の早課 四九九

第七調 主日の早課 五〇〇

至淨なる者よ、原母エワの苦は釋かれたり、爾苦を免れ、夫に與らずして生みたればなり。故に我等皆明に爾を生神女と知りて讚榮す。

又十字架復活の規程。

第一 歌頌、イルモス、「高き臂にて敵を敗る主は」。

救世主は十字架に在りて己の刺されたる脅より我等の爲に生を施す二の泉を流し給へり。我等彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスは墓に入り、三日目に復活して、死に屬する者に其希望たる不朽を與へ給へり。我等彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

生神女讃詞

爾は獨産の後に童貞女と現れたり、世界の爲に身を取りし造成主を生みたればなり。故に我等皆爾に慶べよと呼ぶ。

又至聖なる生神女の規程、第七調。

イルモス、「主よ、曾て流れ易き性の水は」。

仁慈の淵を生みし童貞女よ、我が靈を爾の輝ける光にて照し給へ、我が宜しきに合ひて爾の奇跡の淵を歌はん爲なり。純潔なる者よ、言は我等が罪の矢に傷つけられしを見て、恩主として憐み給へり、故に至りて神聖なる者は言ひ難く爾より取りし身に合せられたり。女宰よ、朽壞に屬して死すべき人の性は死に執らはれたり、爾は生命を孕みて、之を朽壞より生命に升せ給へり。

共頌、「我が口を開きて」。

第三歌頌

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

慈憐なる救世主よ、爾は木に上りて、甘じて我等の爲に苦を受け、信者に和睦と救贖とを得しむる傷を忍び給へり。仁慈なる主よ、我等皆此の傷に由りて爾の父と和睦するを得たり。

ハリストスよ、爾は我靈を蛇に嚙まれて傷つけられし者の傷を淨めて、我昔幽暗と朽壞とに臥したる者に光を顯はせり、蓋十字架に由りて地獄に降りて、我を己と偕に復活せしめ給へり。

生神女讃詞

救世主よ、夫を識らざる爾の母の祈禱に由りて世界に平安を與へ、皇帝に敵に勝たしめ、爾を讃榮する者に言ひ難き爾の光榮を得しめ給へ。

又 イルモス、「言を以て天を堅め」。

第七調 主日の早課 五〇一

第七調 主日の早課 五〇二

十字架に苦しみを忍び、盜賊の爲に樂園を啓きし獨り仁愛なる主よ、恩主及び神として我が智慧を爾の旨に堅め給へ。

三日目に墓より復活して、世界に生命を輝かしし獨り仁愛なる主よ、生を施す主及び神として我が智慧を爾の旨に堅め給へ。

生神女讃詞

種なく神を孕みて、エワを詛より釋きたる童貞女母マリアムよ、爾より身を取りし神に爾の牧群を救はんことを祈り給へ。

又 イルモス、「元始に全能の言にて」。

母童貞女よ、蛇はエデムより葡ひ出でて、我を神と爲らん望に誘ひて、地に倒せり、然れども性の仁慈慈憐なる主は憐みて爾の腹に入り、我に似たる者と爲りて、我を神成し給へり。

生神童貞女、神の聘女、萬衆の歡喜よ、爾の腹の果は祝福せられたり、蓋爾は全世界の爲に喜と、實に罪の憂を散ずる樂とを生み給へり。

神の母童貞女よ、爾は我等の爲に永遠の生命と、光と、安和とを生み給へり、此の安和

は、恩寵の信と承認とに因りて、昔の人人の神及び父に於ける仇を和ぐ。

第四歌頌

イルモス、父の懐を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密を聞き、爾獨人を愛する主を讃榮せり。童貞女より身を取りし無垢なる主宰は己の肩を罪を犯しし僕に傷の爲に與へ、打たれて、我が諸罪を釋き給ふ。神として人を造り、義を以て地を審判する主は法に戻る審判者の前に立ちて、定罪せらるる者の如く詰られ、塵に屬する手にて批たる。

生神女讚詞

純潔なる者よ、實に神の母として爾の造成主及び子に祈りて、我を其光榮なる旨の救を得しむる港に向はしめんことを求め給へ。

又イルモス、「ハリストスよ、預言者は」。

罪を識らざる主よ、爾は罪の爲に曾て有らざりし者と爲りて、本性に屬せざる人體を受け給へり、世界を救ひ、暴虐者を餌して殺さん爲なり。爾は十字架に擧げられて、原祖アダムの罪を釋き給へり。故に我爾の能力の事、爾が凡そ爾の膏つけられし者を救はん爲に臨みしことを聞けり。

生神女讚詞

第七調 主日の早課 五〇三

第七調 主日の早課 五〇四

童貞女より生れし者よ、爾は死したれども、智慧の迷ひたるアダムの活かし給へり。蓋死は爾の能力を畏れたり、爾が凡そ朽壞せし者を救はん爲に臨みたればなり。

又イルモス、「父の懐を離れずして」。

造成の先に神の前に選ばれたる者、極めて華麗光明なる者と現れし讃美たる童貞女よ、爾の豊なる光の輝煌にて爾を歌ふ者を照し給へ。潔き母童貞女よ、爾は人人の爲に爾の潔き血より身を取りし神、愛を以て爾を讃榮恭敬する者を多くの罪より救ふ主を生み給へり。至福にして讃美たる者よ、靈智なる性は今爾の産の言ひ難き奥密を曉りて、爾より輝き出でたる主に奉事す。

第五歌頌

イルモス、ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に明るからず、信者の爲には爾の言を甘ずるに因りて明るし。故に我朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讃め歌ふ。ハリストスよ、爾は己の諸僕の爲に賣られ、頬を撲たるるを忍びて、彼等に自由を得しめ給ふ。故に彼等歌ひて曰ふ、朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讃め歌ふ。ハリストス救世主よ、爾は神たる力に因りて、肉體の弱きを以て強き者を斃し、復活を以て我を死に勝つ者と顯し給へり。

生神女讚詞

讃美たる潔き母よ、爾より身を取りし神を爾は神に合ひて生み給へり、夫を識らずして、聖神に藉りて生みたればなり。

又イルモス、「主我が神よ、我夜より寤めて」。

爾が罪犯者と偕に算へられて、髑髏の處に擧げられし時、光體は隠れ、地は震ひ、殿

の飾なる幔は裂かれて、エウレイ民の背逆を示せり。
爾測り難き爾の神性の能力を以て暴虐者の一切の力を破り、爾の復活を以て死者を起しし主を我等歌を以て崇め讃む。

生神女讃詞

王及び神の母、讚美たる生神女よ、信と愛とに因りて常に歌を以て爾を讃め揚ぐる者に、爾の祈祷を以て諸罪の潔淨を降し給へ。

又 イルモス、「ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に」。

婚姻に與らざる純潔なる女宰よ、イアコフは天に戻る梯を見て、爾の預象を悟れ

第七調 主日の早課 五〇五

第七調 主日の早課 五〇六

り、蓋爾に藉りて神は人人と體合し給へり。
童貞女よ、我等爾に倚りて永遠の救を得て、今熱心に爾に呼ぶ、神の聘女よ、慶べ、讚美たる者よ、我等爾の光を喜びて、歌を以て爾を崇め讃む。
純潔なる童貞女よ、新郎は獨爾を棘の中なる百合の花の如く、潔淨の徳と童貞の光とに輝ける者と見て、新婦としして納れたり。

第六歌頌

イルモス、ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、靈を滅す猛獸に擲たれて、イオナの如く爾に籲ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給へ。
ハリストスよ、地獄に繋ぎ置かれたる義人等の靈は爾を記念して、爾に因る救を祈れり、爾は慈憐なるに因りて來りて、十字架を以て之を最卑きに在る者に與へ給へり。
使徒の會は手にて造られざる生ける爾の堂を、其苦の爲に壞たれしに因りて、再見る望を失ひたれども、望の外に之を拜みて、遍く復活せしを傳へたり。

生神女讃詞

神の聘女たる童貞女よ、我等の爲に成りし爾の言ひ難く玷なき産の景状は人誰か解くを得ん、蓋神言は象り難く爾に合せられて、爾に藉りて肉體と爲り給へり。

又 イルモス、「イオナは地獄の腹より呼べり」。

仁慈なる救世主よ、爾は甘じて十字架に上り、之に罪の書券を釘つけて、敵の權を奪ひ給へり。

救世主よ、爾は權を以て死より復活して、人の族を己と偕に起して、我等に生命と不朽とを賜へり、人を愛する主なればなり。

生神女讃詞

生神女、潔き永貞童女よ、爾が言ひ難く生みし我等の神に爾を歌ふ者を患難より脱れしめんことを絶えず祈り給へ。

又 イルモス、「ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ」。

潔き者よ、律法の預象と預言者の預言とは明に爾萬物の恩主を生まんとする者を示せり。彼は信を以て爾を歌ふ者に屢多方を以て恩を施し給へり。

婚姻に與らざる者よ、爾は罪過より我等を救ひし主を生みて、昔殺人者の悪謀に因りて樂園の神聖なる樂を奪はれし初めて造られたるアダムの復之を獲しめ給へり。

第七調 主日の早課 五〇七

第七調 主日の早課 五〇八

潔き者よ、神たる旨に由りて、全能の力を以て萬物を無より造りし主は爾の腹より出

でて、死の幽暗に在る者を神元の光にて照し給へり。

小讃詞、第七調。

死の權は已に人人を捕ふる能はず、蓋ハリストスは降りて其力を敗りて滅し給へり。地獄は縛られ、預言者は同心に喜びて呼ぶ、救世主は信に居る者に現れたり、信者よ、復活して出でよ。

同讃詞

今最低き處に、地獄及び死は聖三者のの前に戦けり。地は震ひ、地獄の門衛は爾を見たり。一切の造物は諸預言者と偕に喜びて、爾我等の神救世主、今死の力を破りし主に凱歌を奉る。我等はアダム及びアダムより出づる者に呼びて云ふべし、木は復活を樂園に入れたり、信者よ、復活して出でよ。

第七歌頌

イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾は崇め讃めらるる先祖の神なり。アダムは自由に不順を行ひて、木に縁りて殺され、ハリストスの順に縁りて復新にせらる、崇め讃めらるる神の子が我等の爲に釘せらるればなり。崇め讃めらるるハリストスよ、萬物は爾墓より復活せし主を讃め歌へり。蓋爾は地獄に在る者に生命、死せし者に復活、幽暗に在る者に光を施し給へり。

生神女讃詞

塵に屬するアダムの女よ、慶べ、獨神の聘女なる者よ、慶べ、朽壤を去りて、神を生みし者よ、慶べ。潔き者よ、彼に我等衆の救はれんことを祈り給へ。

又 イルモス、「敬虔の少者は火の爐に」。

十字架の木に在りて罪の刺を鈍くし、爾の脅を刺したる戈を以てアダムの罪の書券を破り給ひし主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。脅を刺されて、神聖なる血の注ぐを以て拜偶像の血にて汚されたる地を潔め給ひし主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

生神女讃詞

神の母よ、爾は日より先に在りし光なるハリストスを世界の爲に輝かせり。彼は衆を幽暗より救ひて、神を識る智識を以て照して呼ばしむ、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

又 イルモス、「昔少者は燃ゆる爐を」。

童貞女よ、爾の造成者及び主、崇め讃めらるる先祖の神は爾を黄金にて飾られたる

第七調 主日の早課 五〇九

第七調 主日の早課 五一〇

最もしき器として愛し給へり。

少女よ、昔イサイヤは熾炭を受けて、潔められて、預象の中に崇め讃めらるる先祖の神を生みし爾の産を見たり。

昔神聖なる諸預言者は爾の神妙なる産の預象を見て、欣ばしく歌ひて呼べり、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

第八歌頌

イルモス、燃ゆれども焚けざるシナイの棘は口鈍く言澁るモイセイに神を顯せり。神を慕ふ熱心は三人の少者を火に焚かれざる者と爲して、歌はしめたり、主の悉くの造物

は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。
無玷なる靈智の爲は世界の爲に屠ふられて、律法に循ふ獻物を息め、神として世界を罪より潔めて、常に呼ばしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。
造物主が取り給ひし我が肉體は苦の前には不朽たらざりしに、苦と復活との後には朽壞に與らざる者と爲りて、死に屬する者を新にして呼ばしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。 **生神女讃詞**
至淨なる童貞女よ、爾の潔淨と無玷とは世界の汚穢と憎むべき事とを潔めて、爾我等と神との和睦の縁由と爲り給へり。故に我等悉くの造物は爾童貞女を崇め歌ひて、萬世に讃め揚ぐ。

又 **イルモス**、「惟一無原なる光榮の王」。
甘じて苦を忍び、望に由りて十字架に釘せられて、地獄の軍を敗りし主を、司祭よ、歌へ、人人よ、萬世に讃め揚げよ。
死の權を虚しくし、光榮を以て墓より復活して、人類を救ひし主を、司祭よ、歌へ、人人よ、萬世に讃め揚げよ。 **生神女讃詞**
獨仁慈なる永久の言、末の日に童貞女より生れて、古の詛を釋きたる主を、司祭よ、歌へ、人人よ、萬世に讃め揚げよ。

又 **イルモス**、「燃ゆれども焚けざるシナイの棘は」。
神の母よ、爾は己の産の光にて靈妙に世界を照せり、蓋誠に實在の神を爾の手に抱き給へり。彼は信者を照して常に呼ばしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。
潔き者よ、我等敬虔に爾の腹を歌ふ、蓋此は言ひ難く人體を取りたる神を容れたり。彼は衆信者に神智の光照を賜ひて常に呼ばしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、

第七調 主日の早課 五一
第七調 主日の早課 五一二

萬世に讃め揚げよ。
光の母、潔き生神女よ、爾は己の光の耀を以て爾を歌ふ者を照し給へり。蓋光の居所と爲りて、凡の者を光照して呼ばしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、**附唱と共に**、「ヘルウィムより尊く」。

第九歌頌

イルモス、汚に染まずして生み、萬の物を造りし言に肉體を予へし夫を識らざる母、生神童貞女、容れ難き者の器、限なき爾の造成主の住所よ、我等爾を崇め讃む。
凡そ異端を唱へて、神の性は苦を受けたりと云ふ者は口を緘ぢよ。我等が崇め讃むる一位にして兩性を兼ねる光榮の主は神の性を以てするにあらずして、肉身を以て十字架に釘せられたり。
肉體の復活を信ぜざる者はハリストスの墓に往きて學べ、蓋彼は殺されたれども、生を施す主の肉身は復活して、我等の望める最後の復活を信ぜしむ。

聖三者讃詞

我等の尊める者は神性の三にあらずして、位の三なり、又位の一にあらずして、神性の一なり。我等は神性を分つ者を斷ち、又位を混淆する者を斥く。

又 イルモス、「神の母又童貞女」。

光よりする光、世の無き先より發する父の光榮の輝煌なるハリストスは、幽暗の中に在る人の生命を照して、之を蔽へる暗を散じ給へり。我等信者は絶えず彼を崇め讃む。ハリストスの中に肉體の苦と神性の能力とを見て、其性を一なりと思ふ者は辱を蒙るべし、蓋彼は人として死し、萬有の造成主として起き給ふ。復活の宣傳者はハリストスの起きたるを福音して呼べり、女等よ、香料は死者に屬す、生ける者には歌頌を獻ぜよ、涙は死する者に屬す、萬衆の生命には歌を獻ぜよ。

生神女讃詞

教會は爾に呼ぶ、信ぜざる異邦民の中より我を己の聘女として選びし主よ、我爾の外に他の神を識らず。言よ、慈憐なる主として、爾を生みし者の祈祷に因りて信者に救を施し給へ。

又 イルモス同上

永貞童女よ、爾は救世主を生みて、我等彼を救を施す神として、眞と神とを以て尊む者の爲に永遠の喜と樂との中保者と爲り給へり。

第七調 主日の早課 五一三

第七調 主日の早課 五一四

至淨なる者よ、爾の先祖ダavidは爾を歌ひて、神妙なる聖物の櫃と名づけたり、蓋爾は父の懷に坐する神を性を超えて容れ給へり。我等信者は絶えず彼を崇め讃む。少女よ、爾は實に悉くの造物より上なる者なり、萬物の造成主、人體を受けし者を我等の爲に生みたればなり。故に唯一の主宰の母として、並なく衆に勝り給ふ。

共頌の後に小聯禱。次ぎて主我等の神は聖なり、三次。早課の差遣詞。

「凡そ呼吸ある者」に主日の讃頌、第七調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。ハリストスは死の械繫を壞りて、死より復活せり。地よ、大なる喜を福音せよ、天よ、神の光榮を歌へ。

句、神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス、獨罪なき者を拜むべし。

句、其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

我等はハリストスの復活を拜みて止めず、聖なる主イイススは復活を顯して、我等を吾が不法より救ひ給へばなり。

句、角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

凡そ主の我等に行ひし事には、我等何を以て報いん。我等の爲に神は人の間に在り、朽ちたる性の爲に言は肉體と成りて、我等の中に居りたり。恩を知らざる者には恩者、被擄者には自由を與ふる者、幽暗に坐する者には義の日臨めり。苦に與らざる者は十字架の上に、光は地獄に、生命は死の中に在り、復活は陥りし者の爲なり。我等彼に呼ばん、吾が神よ、光榮は爾に歸す。

又 讃頌、アナトリーの作。同調。

句、鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

主よ、爾は地獄の門を破り、爾の堅固なる力を以て死の權を虚しくし、萬衆の王及び全能の神として、爾の神聖にして光榮なる復活を以て、古世より幽暗の中に寝ぬる死者

を己と偕に起こし給へり。

句、和聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

來りて、主の前に喜びて、其復活の爲に樂しまん、蓋彼は死者を地獄の解き難き縲紲より己と偕に起し、神として世界に永遠の生命と大なる憐とを賜へり。

第七調 主日の早課 五一五

第七調 主日の早課 五一六

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる毋れ。

輝ける天使は生命を受けたる墓の石の上に坐して、攜香女に福音して云へり、主は復活せり、前に爾等に言ひしが如し、其門徒に告げて曰へ、彼は爾等に先だちてガリレヤに往く、且世界に永遠の生命と大なる憐とを賜ふ。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

嗚呼至りて不法なるイウデヤ人よ、何ぞ屋隅の首石を棄てられたる者と爲しし、視よ、此れ神がシオンに置きたる者なり。彼は野に於て石より水を流しし者、我等に脅より不死を流し給ふ者なり。此の石は乃人欲に由らずして童貞女の山より斫り分けられたる者なり、此はダニイルの言ひし如く、天の雲に乗りて日の老いたる者の前に至る人の子なり、其國は永久なり。

光榮、早課の福音の讃頌。今も、「生神童貞女よ、爾は至りて讃美たる者なり」。大詠頌。

次ぎて復活の讃詞。

今救は世界に及べり。我等墓より復活せし吾が生命の首なる主に歌ふ、其死にて死を滅し、我等に勝利と大なる慈憐とを賜へばなり。

次ぎて聯禱、及び發放詞。



リトゥルギヤ 聖體禮儀の眞福詞、第七調。

美しくして食ふに善き果は我を殺せり。ハリストスは生命の樹なり、我是より食ひて死せず、乃盜賊と共に呼ぶ、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。

恵深き主よ、爾は十字架に上りて、アダムの古の罪の書券を抹し、全人類を迷より救ひ給へり。故に我等爾恩を施す主を崇め歌ふ。

句、和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。

恵深きハリストスよ、爾は我等の罪を十字架に釘うちて、爾の死にて死を滅し、死せし者を死より起こし給へり。故に我等爾の聖なる復活に伏拜す。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

蛇は昔エワの耳に毒を注げり、ハリストスは十字架の木に在りて世界に生命の甘を流し給へり。故に我等呼ぶ、主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を偽りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

萬有の生命たるハリストスよ、爾は死に屬する者の如く墓に置かれたれども、地獄の柱

くじ ぜんとうしゃ こうえい もつ みつかめ ふつかつ ばんゆう てら たま こうえい
を折き、全能者として光榮を以て三日目に復活して、萬有を照し給へり。光榮

第七調 主日の聖體禮儀 五一七

第七調 主日の聖體禮儀 五一八

なんじ ふつかつ き
は爾の復活に歸す。

よるこ たの てん なんじら むくいおお
句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

しゅ みつかめ し ふつかつ おのれ へいあん もんど たま かれら しゆくふく つかわ い
主は三日目に死より復活して、己の平安を門徒に賜ひ、彼等を祝福して遣して云へり、
ばんみん わくに きた
萬民を我が國に來らしめよ。

光榮、聖三者讃詞。

ちち ひかり こおよ ことば ひかり せいしん ひかり みつ もの ひとつ ひかり けだしひとつ かみ さんい
父は光、子及び言は光、聖神は光なれども、三の者は一の光なり、蓋一の神は三位
にして、いつせいいちげん ぶんり こんごう えいえん
にして、一性一源、分離せず混合せずして永遠なり。

今も、生神女讃詞。

しょうしんじょ なんじ ちち こおよ ことば われら ため み う たま かれ みずか し ごと ゆえ
生神女よ、爾は父の子及び言を我等の爲に身にて生み給へり、彼の自ら知るが如し。故
どうていじよはは われら なんじ よ おのれ しんせい なんじ よ ち たのみ
に童貞女母よ、我等は爾に因りて神成せられて、爾に呼ぶ、「ハリスティアニン」等の恃頼
よ、慶べ。

提綱、第七調。

しゅ そのたみ ちから たま しゅ そのたみ へいあん ふく くだ かみ しよし しゅ けん こうえい
主は其民に力を賜ひ、主は其民に平安の福を降さん。句、神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮
そんき しゅ けん
と尊貴とを主に獻ぜよ。

しじょうもの しゅ さんえい なんじ な うた び かな なんじ あわれみ あさ
「アレルイヤ」、至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌ふは美なる哉。句、爾の憐みを朝
の なんじ まこと よ の び かな
に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉。

